

# 雪女五枚羽子板

## 上の巻

樂車云々山車  
を曳いて離し立  
つるを見よと也  
な、や、さは柏子  
詞、此明松の落  
葉卷三にあり  
藤内太郎の名は  
四の巻にあり  
紫竹云々一笛に  
造る竹にて之を  
吹けば塵を拂ふ  
となり、美聲を  
發するを塵を  
掃除と云ふ

天曆の帝一村上  
帝

樂車うつて囃した。樂車うつた見さいな藤内太郎。アリヤコリヤ、殿はな、笛吹のヤ、家で、紫竹寒竹、埃をさ、さつさと拂ふて、到來のく、お年玉は到來の、此方からも造いのと、合せ吹たるはさつても吹た笛吹と、哄と褒て通した。門松立て囃した、御松囃を見さいな藤内太郎。アリヤコリヤ、殿はな、斯波殿のヤ、御近習。弓矢打物お馬をさ、さつさと乗初や、蓬萊のく、樞搗栗膝栗毛、鬘斗毘布にかはら毛と、祝ひ乗たるは、さつても伊達なお侍と、チロシどつと都に褒にける。主君斯波左衛門義將は、常家の管領たるに依て、藤内太郎が文武の器量、將軍義教公の上聞に達し、御直の諸武士同然に、年頭五節の御目見え。殊更笛の達人にて、小水龍といふ名管を、上より預け下さるよ。そも此笛は、天曆の帝の御寶物。國に異しみある時は、吹ぬにをのれと音を出す神妙あ

兵亂一ヒヤウを  
笛の音にかけた  
り  
御座離一正月に  
行ふ儀式、笛や  
鼓にて舞し立つ  
虎一宵の時にか

目覺草一煙草、  
服部は其産地、  
初難にかく  
ひはだ一槍皮茸  
の屋根  
茶宇一舶來の絹  
布にて輕くして  
薄し

標過一ひねびる  
に同じくませ過  
ぎたる意

り。御先祖尊氏將軍より、代々に聞ふる笛の音の、ひいや兵亂治りて、寶祚百王の堅めたり。時は永享八年正月三日、將軍家の御松囃、北山の御所にてあるべしと、藤内太郎は笛の役、御預の小有龍、餘寒の風に吹反らし、未だ夜も深き五更の一點、虎の御門に着にけり。太郎挾箱に腰打懸、御松囃は辰の刻との御觸なれば、役人伺候の諸大名夜の中より群參あるべきに、御所の内寂寞として御門も未だ開かれず。不思議さや退屈さ一奴に持せし烟管筒、一吹詰で燻らする、目覺草は服部の、八聲も鐘も霞み行く。門のひはだを踏越ゆる、霜の振袖角前髪、取交す手もわななくと、女が帶の若紫、茶宇の袴の信夫摺、亂れ逢し密通の、欠落とこそ知られけれ。咎めて無益、見ぬ顔せんと、下人等にも私語て、築地の蔭に忍ぶとは、見すや知らずや門松を、傳ひ下りたる人も木も、連理の女松男松かや。太郎いよく身をかくす、彼の若者佶と見て、打物抜て弓手より、聲もかけず打かくる。刀の柄にて拳を打ち、太刀振落させ、二の拍子にて胴骨あて、踏ければ女は又、右の方より打かくる。拳を打んと持たる笛、振り上るを附入つて、笛を二ツに切折たり。太「すは白物」と取て引寄せ、二人をどうと引敷て、「ヤア媚過たる奴等かな。斯波左衛門が家來、藤内太郎家治ぞ知つらん。をのれ等不義の欠落見遁しにする處に、却て

四職衆一侍所の  
所司を務むる赤  
松二色、山名、  
京極を云ふ

隱密一内密

節分云々―追儼  
の夜を年取の夜  
と云ふ（但言衆  
賢）

敵對ひ、剩へ御預りの笛を切折、言語道斷の始末、白狀せば許すべし。僞らば繩をかけ、四職衆の白洲に引据え、一家一門の恥を見るか。サア分別次第と申しける。若者憶する氣色なく、「ヲ、藤内太郎能くしつたり。我は一色が末子、大炊介久常といふ奥小姓。此女は御臺處に紵卷といふ御侍女。阿漕が浦の脱舟も、度重りし通路の、赤沼入道幸滿に見付られ、御成敗たるべきを、直に入道が計ひにて、隱密に命を助け、御所を夜拔にせさせ、此恩賞には、御門前に藤内太郎相詰たり。お預りの笛を二ツに切折て得させよといふ。心得ずとは思ひながら、一旦の恩を受け、否といふは卑怯と思ひ、さてこそ笛を切折たれば、入道が恩は報じたり。さて是からは其方への咄。入道が根心、上へ對して其意を得ず。御分が主人左衛門にも言聽せ、必ず油斷あるべからず。某身にも望みあり。正八幡ぞ僞りなし。なんと落してくれまいか」と、理非を決して語りける。太「ヲ、一色大炊介殿、承り及ふだ。お身柄と申し、御誓文虚言はあるまじ。さりながら、明朝は御松囃のお觸なるに、はや東雲に及べども、其沙汰なきは様子ぞあらん。御前向を有體に承らん」といひければ、紵卷聞て、「ム、さては御存じ候はぬか。昨夜俄に變替り、松囃は明日の晩、赤沼の方へ御成にて、節分のお年取御遊覽とのお事にて、皆々お觸れが廻り

筒拔—語りひ  
聞ゆる

奈落—どこ迄も  
盃春—物申うに  
かく

升—増すに  
鬮云々—節分に  
鬮の頭に柁の枝  
を添へて門口に  
かく、邪鬼を防  
ぐ爲  
年男—鬼やらひ  
の豆撒などを務  
むる役

通り者—通人

しに、假へお觸がないとて、お前の事を知らぬとは、エイ好い加減な事ばかり。朋輩の中川殿と、此方様との挨拶が、大體並みの事かいの。奥の事は筒拔け、飛脚より優じやもの。知らぬとは小面憎う、打ちたいまで」と笑ひける。太ア、音高しく。さては赤沼奴が此笛を過たせ、我々主従越度にせんとて、御祝儀までを延引せし、一大事を承る御厚恩には、御身の上、奈落までも隠密ぞや。はや夜も明る。落ち給へ」と、別るゝ方の禮者の聲、物盃春の御年玉、取かはしたる扇子箱、日本目出度き年越や。今日から一ツ年の數、升到熬豆腐は内、鬼は外面に深翠、柁に鬼も恐ると、鬮の頭梅が香の、解け初めたる下紐は、心ありけにつちのこまで、春めく御代こそ三重豊なれ。御大將義教公、赤沼が館に入御あつて、追儼の御祝儀行はる。年男には熊橋犬二郎満景、御年豆を献ずれば、赤沼前司入道幸滿、子息新判官、則久御前に畏り、「冥加に餘る御成、一家の面目此上や候べき。然れば、毎年御所にての御祝儀は、斯波島山細川などを始め、馬鹿慇懃の頑侍、卷舌の諸禮、折目正しき正月詞、嘸御窮屈と存じ、某が御馳走には、御供の諸大名残らず退出致させ、古流な事をサラリと止め、奥方の女中の中の通り者、其外洛中に娘子供の色好きが、御座んす詞の酒のこなし、上覽に入れん爲、召寄せ置て候」

お小夜一押へにか  
か  
昔戸一縫るにか  
く  
義教一よしにか  
く  
うつ、一打つに  
かく

四魔一建魔、死  
魔、天魔、煩惱魔  
(釋氏要覽)  
三障一皮、肉、心  
の三類

と、豫て仕度の色揃へ、御侍女の其の中に、心意氣も風俗も、これ當流の眞中川、酒になりての名人さ。飲ず<sup>のま</sup>に人をお小夜の君、琴三味線の撥音は、誰も袂に菅戸かや。さて又町には、姉が小路の針屋の縫、紺屋のお染、白粉屋の艶、糸屋の房、舞子踊妓小唄の節、上手に座敷を待ければ、猶御機嫌は義教公、烏帽子の紐も直垂も、打解給ひ膝枕、足擦られつ御腰を、うつよともなき酒宴なり。入道時分可しと思ひ、「さて節分の夜、厄拂と申して民間には行はれ、上つ方には御存じなし。御身の大事とある物を、捨るといふて某に預られ、厄拂ひの詞をのべて咒へば、悪病邪氣を除くと申す。疾くく行ひ奉らん」とぞ申しける。義教公、佞人の詞を誠と信じ給ひ、義幸ひ是に先祖よりの印判、軍兵を集め、關所廻船、日本を治むるも此判一個。是を少時預くる」と、錦の袋に入れながら、「サ、控た」と投げ給へば、ス「お厄は我門拾ひ除け、四魔三障祟りはなし。これ女子共、都の町の厄拂ひ、物は咒ひ出るまよに拂ひ申せ」とありければ、女「あつ」と應へて口々に、厄拂ひをぞまねびける。

はつはるやく  
初春厄はらひ

西王母云々一四  
武帝食桃欲留  
其核王母曰此  
桃三千年一實耳  
云々(列仙傳)

こきやかう「鴈  
の鳴聲にて厄拂  
を納むる時の可  
がいに」該の多  
きを云ふ(傳言  
集覽)

めなご一女子  
(同書)

数日云々一節句  
日の多し事

「やあら目出度や。此方の御壽命申さば、鶴は千年龜は萬年、浦島太郎が八千歳、東方朔が九千歳。西王母が桃の核、猿豆小豆、親も健鳥雛鳥の、翼重ねに寶は集る。家は治まる持丸長者の、四方に四方の藏の戸前の明け行く年から、福神達の御意向。一に市姫辨才天女、二は西の宮若惠美壽殿、三は三面大黒頭巾の髪の数々、十二箇月は無病息災、其身は鐵槌打出の小槌、打て打出す金錢銀錢。福德圓滿惡魔外道、打拂ふて西の海へ、さらりくさつさこきやかう」まづ斯う祝ひ治むるは、是上方の厄拂ひ。扱また東國の果にては、斯こそ厄を拂ひけれ。「お厄拂ひく、厄つつ拂ひ申すべし。がいに目出度い此方の御壽命語るべしなら、鶴と龜奴が何打食つて、すつ百万年、のめりくと死ばり外れにあやかりなされ。父們母們に爺媪息災、めなご小倅産の儘なる餓鬼十二疋、錢金俵や小袖の中から、目玉剥出し耳朶大かく、五百八十七曲り、惡魔外道打拂つて、西の海へ打投ける。こつきやつこう」と祝ふとかや。此處に名に立つ色廓、揚屋女郎の厄拂ひ、又珍らかに斯もなん。「あらく目出度や此方様の、御壽命申さば苦海十年。蠅かとまつて鶴は千年、龜は萬年。浦島太郎が重箱肴、紋日くは一歳に、かず数の子も御盛んや。何時大服の茶は挽ず。揚屋に海參煎藏鮑。幫間相客宿屋駕舁の附届け、こそこ

身揚り女郎が  
搦代を自毀する  
もどもり一  
身揚りの掃の掃り  
九千兩一  
九千歳  
梅法師一借を埋  
めるに  
四年一妓(よね)  
紙はなして後に紙  
文讀して後に紙  
と引替る其はな  
願すと一こぼす  
とも  
しつ客一七と濯  
奮とかく

まんが直る一紙  
が胸いて来る

そ宿の情事、身揚り分のおどもりも、東方朔が九千兩。それで残らず梅法師、井戸へ釣れた大黒天も、好い客踏まへた俵子や。蜜柑柑子大々盡、子の日の松や根引の四年。三年前の紙纏頭空纏頭、捨たふるがけ。今年はくるく、廓の全盛。炬燵に火を爲い、床せい、酌せい。酒は翻すと仕着は厭はじ。禿がぶんぜに駒は古さに、寶引骨牌をうつよら王子が八千歳。女郎に口説の痞も下り、鵝婦は際の血の道なく、揚屋く、の賑は、二階中の間奥座敷、五客六客しつきやく入れず。さてこそ不審春の日の、長ふ要らぬは見せかけ大盡悪業末社の、鳥渡借着に食物吸物、小言いふ人、親仁の意見に手代の始末、一ツ遣ては三度かる客、是が廓での悪魔外道。打拂ふて西の海へさらりく「こきやこう」とこそ拂ひけれ。大將なほく御盃の、數も睡も傾て、伺候の女に誘はれ、寢殿深く入り給ふ。入道親子見送り、ス「サア熊橋してやつた。甚麼厄を拂ふとて、天下を治むる此印判、人手に渡す控伺、滅すに思案は入らず。むづかしいは斯波細川、此判を以て義教の下知と偽り、鎌倉勢を催し、一戦に討取るべし。此年越からまんが直つた。これ熊橋、來年はめつきりと好い年取らせう。精出せ」と點頭悦ぶ折節、御侍女の中川、づかくと走出、「これ赤沼殿、只今の御判はお厄落しの咒ひに、少との間お預りかと思ひしに、戻さず其處に留

置いて、何とやら密々と、妾は如何とも飲込れず。女子なれども、御臺様よりお附けなされた此中川。サア其御判を戻さうか、戻さぬか。戻しやらねば思案がある」と、男優りの氣色なり。入道動せぬ面相にて、「ヲ、好い處へ來召された。これにこそ仔細あれ。斯波左衛門義將諫言申すが御氣に入らず。密に諸國の軍兵を集め、左衛門滅す御催し、それを聞て笑止さに、御判をさへ取つたれば、軍兵一騎寄せる事もかなはぬゆゑ、やうく賺し取たる御判。聞けば和女は斯波が家來、藤内太郎家治と夫婦の契約して居るけな。是に付て大事がある。藤内太郎は御預りの笛を折る。それを越度の仰にて、今宵是へ召寄せて、お手討ちになさるゝ筈、今宵さへ過しなば、明日は某御訴訟申し、藤内は助く可し。何卒お側の刃物ども、盗む事はなるまいか。如何にしても笑止な」と、誠しやかに言ければ、有繫女の一筋に、中「ア、忝き御知せ。良人の命助くると申し、斯波殿とても良人の主人、よしなき疑ひ恥しや。上には事ない九獻にて御躰の最中、密と御太刀を取りませう」ス「ヲ、それく目の覺ぬ中、片時も早ふ太刀刀奪取、高遣戸の小庭から、椿畑の妻戸を明け、松葉の口に待たれよ。土戸の錠を明させん。それを合圖に密と抜け、左衛門方へ落ちられよ。飲込だか。仕損ずまいぞ」中「ア、身にかよつた事じやもの。其處邊に

上には事ない  
義教公は酒に正  
體もなし



目抜―目を抜く  
と刀の目貫とか  
切羽―瀬戸にか  
く  
敷―冷めるにか  
く  
白雪―知らずにか  
かく

氣遣ひなざるよな」と、奥を差てぞ入りにける。ス「そりや又彼奴も喰せたは。屋敷の内をうろつかせ、曉方に引捕へ、斯波左衛門逆心にて、家來藤内が密通の女に、御太刀を盗ませしと、證據を出す上からは、好い仕合で切腹道具。今宵は如何した夢がな見る。此方は誠の寶舟。舳先が向いた。飲め、勢へ」と、勇み頭をふる三重雪空の、雲凄じく更にけり。時分は好しと中川、義教公の枕の太刀、奪取て出けるが、思へば品こそ替つたれ。欲心ならで此太刀も、主の目抜の盗み物、生きる死ぬるの切羽ぞと、心も後れ手も顫ひ、持たる太刀の柄鮫や、鰐に追るよ心地して、檜書院に出にけり。遣戸をそろりと明ければ、吹雪と跡の恐ろしさ。縮む心の駒下駄に、「怪しめらるな。エ、儘よ」と、素足の雪に飛下るれば、劍を踏むが如くなり。跡より赤沼尾け來り、遣戸に鉞を下せども、中川それとは白雪を、打拂ひく、土戸を押せども開かねば、「さては未だ早がりつ」と、暫し待つ間のかきたれて、翻すが如く降る雪の、庭も埋れて白妙に、立寄る櫓も横吹雪、袖打拂ふ陰もなし。佐野のわたりも左のみやは、嵐は五體を劈けり。袂は捲て防けども、襟に溜りし雪解て、膚は水に浸さるよ、足は膝まで埋るよ、鬢の氷柱は白銀の、瑤瑤かけし如くなり。「ア、寒や苦しや」と、顫ひ上りて齒も合す。「通路ならで是も亦、男の爲じや、

寒苦鳥一、天竺野  
山に栖む、夜寒  
さに堪へざれば  
巢を作らんとす  
るも盤になれば  
応ると云ふ

戀じやもの。此處を一ツ怵えやう」と、身を抱締むれば息切るよ。雪にて口を露せば、身の内まで沁凍り、寒苦鳥の苦みかや。「立歸つて湯一杯」と、腰まで埋む大雪を、押分け踏分け遣戸に縋り、押せども引けども明かばこそ。「南無三寶。誰かは錠を下せし」と、立歸れども時の間に、分來し跡を降埋み、波路を凌ぐ其風情、土戸は猶も明かばこそ。次第次第に降重なり、身も埋るよ其苦しさ。中「エ、さては誑られたか口惜や。病に臥し刃に伏し、火水に死するはある慣ひ。殺しやうもあるべきに、雪に凍やし殺さんとは、をのれ入道奴、むざくとは死ぬまい」と、埋るよ雪を這出れば踏沈み、這上り踏落し、嵐は咽に吹逼り、呼はる聲も立たばこそ。手足も凍え、身も冷え渡り、「寒や冷たや苦しや。なふ藤内殿く、我夫なふ。ま一度逢ふて死にたいぞ」と、雪に喰付涙の氷、眼も口も閉られて、天ぎる雪はばうくく。寒風しきりにさつくくくと、五臟六腑に刺す如く、息の保ちもあらばこそ。二十歳の春の花待敢へぬ、雪に先立ち消えけるは、敢なき最期や。三置語 東南に雲起つて、西北に風靜ならず。夕暗の、空も轟く雪の夜の、あら物凄の景色やな。斯波左衛門義將は、「今宵しも小水龍の、をのれと音を出す不思議さよ。君の御事氣遣はし」と、人馬も具せず、藤内一人提灯燈させ、雪踏分て赤沼が、門の此方に着

雪女―雪の帯の  
人に化けたるを  
云ふ

きけるが、俄に持せし提灯の、吹消す様に消えてけり。堀の内より白鷺の飛ぶ如く、雪  
渦て提灯に、映ると齊しく女の姿。白衣白髪白妙の、雪女とも謂つべし。左衛門主従、  
太刀の柄に手をかくれば、女なふ見忘れ給ふか藤内殿。互ひに忍びて落合の、漏さぬ水は  
御身と我。思ひ二つの中川が、幽霊是まで来りたり。口惜や、赤沼親子逆心にて、君の  
御判を奪取、みづからには御太刀を奪はせ、左衛門様我夫にも、其科覆せて失はん、謀  
計と知らで盗み出る、道の前後鋭下し、今宵の雪に埋れて、凍やかし殺されし。此世か  
らの八寒の、苦患は我身一ツにて、いとし可愛の我良人、主従の御命助けたや救ひたや  
と、思ふ一念凝りつき、只今知らせ申すぞとよ。此御太刀義教公へ差上、御身の分疏立  
て給へ。名残惜の我夫や、此世の縁の薄雪も、永き契りは厚氷、結び添へく、生々世  
世によも解けじ。さらばく」と泣く涙の、雲と消て亡せたりけり。藤内涙を押拭ひ、「を  
のれ入道奴、妻の敵國家の仇、首引抜いてくれんず」と跳入るを、斯やれ待て是は一應な  
らず。申しても天下の大事。大將の御座といひ、御直衆に慮外せしと、いはれては理非  
立たず。是に控へて伺ふべし。罷出でば勘當ぞ」と、宥め給へば藤内太郎、「あつ」と鎖めて  
控へたり。其身は衣紋引繕ひ、御太刀持て静々と、廣間に立て、斯「お小性衆く、斯波

五常一仁義禮智  
信

左衛門義將御機嫌伺ひ申す」と、高々と宣へば、「すは左衛門よ討取れ」と、赤沼親子、犬二郎、「心得たり」と出けるが、有繫五常の徳備はり、威あつて猛からぬ、忠臣の威光に氣を呑まれ、「ヤア斯波殿奇特の御出」と、手を揉でこそ居たりけれ。大將、斯波と聞給ひ、寢惚髮に烏帽子引懸け出給ふ。左衛門莞爾と笑ひ、「義將は今宵珍らしき夢を見、御物語の爲伺候仕る。いやはや夢は可笑いもの。これ赤沼殿、御氣にばしかけれな。貴殿逆心の企にて、尊氏公より御相傳の御印判を賺取り、御侍女の中川を瞞し御太刀を奪はせ、罪を某に覆せて、此左衛門に切腹させんず謀と、まざく〜と見たる夢、覺むるとひとしく、枕元に此御太刀のあつたるは、何んと正夢とは思さぬか。夢なればこそ御仕合、若し誠にてあるならば、赤沼殿でも青沼殿でも、御前にて只中を、親子繫ぎに突抜くか。又一戦に及ぶとも、和主如きの相手に、騎馬を向るまでもなし。左衛門が足輕十騎ばかり差向けば、朝かけに擲て洛中を引渡し、何んでも柱一本の主にしてくれんもの。去ながら春の夢は合ぬもの、必ずお氣にかけられな」と、かんらからとぞ笑はるよ。赤沼も言込められじと、入いや是れ義將、和殿が今の言分は、其身の過りに言せぬ前置に、冒頭から出る詞なりと此入道は聞き申した。ヲ、思付たり。御預りの小水龍の笛を

柱一本一破

兩刃の劍云々  
比譬徒然草に出  
づ

打ちを、御咎めを恐るゝ由。夫れ程の事は、某が申譯をして遣らん。エ、氣の狭い。左程の事、氣苦勞に召さるゝな。左衛門殿とぞ申しける。藤内太郎飛で出、威丈高になつて、「これ入道、兩刃の劍にて人を切るに、振上さまに、我先づ切らるゝといふ譬あり。まづ其如く、人を惡に陥さんとて、身の惡を囀るか。其御笛は此藤内太郎家治が預り奉り、先日北山の御門にて一色大炊介を、をのれが頼んで切らせたを忘れたか。功ある者の心懸、誠の小水龍は庫に藏め、影を作つて持たるゆゑ、うぬが頼んで切らせたは、其影の笛なりしは控侗者。誠の小水龍といふ御笛、天曆の帝勅筆の銘ありて、天下の大事に自然と鳴る。只今も音を出し、怪しさに馳參す。是を見よ」と差出し、「是程大事の御寶を、何として御邊は大炊介を頼んで切折れとは言ひしぞ。笛を切るが好きならば、をのれが咽笛切折らん」と、詰蒐れば義將、「ヤア藤内、御前といひ、主を差措き憚り千萬。罷退去れ推參者、赤沼入道ともあらん人が、笛を切折り、遺恨を晴すなどといふ、若輩所爲のあるべき歟。假しそれはあるにもせよ、上は天下の武將たり、御譜代忠功の斯波の武衛、笛一本に思召返られんや。とは思へども忠臣を厭ひ、佞人に心を許し、酒宴妓樂に御目眩み、枕元の太刀取らるゝ程の大愚將。山鷄を鳳凰とし、燕石を珠と見て、國を失

燕石一玉に似た

老石、説苑に宋人魏石を玉として藏する話あり

追従一へつらひ  
莫耶一干將莫耶  
とて厩山の名刺  
章甫一歸者の冠  
る冠  
首陽一伯夷叔齊  
の世を遁れし處

ひ身を破り、名を末代に損ひ給はん事、口惜の御所存や」と、拳を握り席を打ち、涙を流して教訓ある。大將御氣色變つて、義折こそあれ祝儀の座敷。おのれ一人智慧ありけに、愚將とは誰が事ぞ。罷立て閉門せよ」と、大きに怒つて仰せらる。左衛門突と進出、愚將と申すは我君の事よ。愚將と申すが御耳に觸る程ならば、など佞臣忠臣の詞を聞き分給はぬ。淺ましきよ愚さよ。御祖父義詮將軍、御父鹿苑院殿義滿公、御舍兄勝定院殿義持公、御先代義量公、我君までは五代。我々は三代管領職を承つて、終に閉門の例候はず。左程過りある左衛門ならば、閉門までもなく、御指料を以て御手討になさるか。但御氣に入りの赤沼入道、子息新判官、此歴々に討手を仰付られ、軍勢を以て此左衛門を、など攻滅し給はぬぞや。ヲ、赤沼なんどの手に及ばぬは理りく。軍といふものは、酒宴遊興に事かはり、命づくのものなれば、鯨波の聲矢叫びに怯れて、馬より落て目を廻さんより、追従言ふて世を渡るが、一段の思案ならん。エ、これ我君、莫耶を鈍しとし、鉛刀を鋭しといひ、周の鼎を棄て、瓢箪を寶とするといひしは、御身の上と御存じなき歟。麒麟も繫れて動ねば犬猫に同じ。渴しても盗泉の水を飲ずとは、義者の御存る處。章甫の冠を沓に履れんより、首陽山に蕨餅を練り、泊羅に沈んで、江魚の腹

汨羅一屈原の窮  
死せし處  
聚斂一苛酷の微  
税

梟松桂の云々  
荒廢の地也、梟  
鳴松桂枝孤靡、  
聞菊臺（白氏文  
集）

中に葬られんには如かじ。某都を開きなば、赤松細川畠山、結城長沼仁木石堂、大内今川山名京極宇都宮、凡そ名ある諸大名、頼もしけなき世を憤り、面々分國に引籠らば、民百姓は貢物を私し、地頭郡司に聚斂ありて、國を惠む糧盡し時には、四海野心を含み、四夷八蠻一度に起つて、攻來らんは必定。其時には御寵愛の佞臣奸人、味方を捨て敵に降り、君一人敵の擒となり給ひ、元祖尊氏公の御勳功も一度に朽ち、御父義滿公の七寶八貨に、金銀を鏤め造り給ひし北山の金閣、室町殿の花の殿、三條の紅葉の殿、野原となつて梟松桂の枝に啼き、狐蘭菊に隠れ柄んで、御山彦ならで、誰か昔を問ふ人の候べき。其時には此斯波が詞を思召出され、天を望み地に爪立て、臍を嚙んで悔み給はん事、掌を指が如し。三度諫めて用ひざれば、身を報じて去るといへり。左衛門が一生の諫言も是迄なり。仲尼は炊水を受けて衛の國を去り給ふ。某も其如く、宿所へも歸らず、直に他國仕る。お暇申す」と罷立つ。赤沼判官突立て、「こりや左衛門、主君に暇出す推參者、餘さじ」と飛で蒐る。藤内太郎驅隔たり、太ヤアをのれ如きの鐙刀が、主人の身に立つべきか。ま一度身悶へするならば、御前とは言はせぬ」と、はつたと睨めば義教公、「やれ待て赤沼、討手を以て左衛門が首を取る。静まれ」と御諛ある。左衛

直兜一同甲冑  
を帯する事

赤魚一仲壽き事

門少しも臆せず、「討手とは有難し。速に腹切て汚れ首を差上ぐべし。去ながら、討手の人  
人は誰ならん。其相手によつて一戦の勝負を決し、討手の首を此方へ拜領いたし候べ  
し。慮外と思召されぬ爲、御断り申し置く。藤内太郎供をせい」と、御前を立て悠々と、  
願もせず立退きしは、臣下の龜鑑弓取の、鑑とこそは三重見えにけれ。斯波左衛門義將  
は、腹巻に小具足固め、侍には藤内太郎家治、若黨少々、旗指一騎相具して、都を隔つる  
山崎や、關戸の院にぞ着にける。斯りし處に緋緘の鎧、月毛の馬に乗つたる武者、直兜  
五十騎許引牽し、「ヤアく左衛門、御暇申し捨、京都を開く慮外者、討取て參るべしと、  
大將軍義教公の仰を蒙り、細川右馬丞勝秀向ふたり。引返せ」とぞ呼はりける。左衛門聞  
もあへず「なに勝秀とや。假へ千萬騎向ふとも、打物の續ん程攻戦はんと思ひしが、勝秀  
と聞くからは、速に腹切らん。首取て歸れ」とて、どうと座を組居たりける。勝秀馬より  
飛で下り、「やれ待て左衛門。和殿が切腹に三箇條の不審あり。勝秀が武勇に恐れての切  
腹かこれ一ツ。日來水魚の朋輩の、討手に向ふ恨みの腹かこれ二ツ。まッた浮世を軽く  
見て、身を見限て切る腹か。三ツに一ツを言ふて死ね」とぞ申さるよ。左衛門打笑み、  
「ホ、ウ有繫勝秀程ありけるよ。問憎い事を能く問ふたり。然らば其方にも不審あり。人



斷金一仲善き  
事二人同心其  
利斷金(易經)

こそ多きに御邊が此討手は、此義將が諫言を僻事と思ふ歟一ツ。但某程の弓取の首取で、高名せんと思ふ歟二ツ。まッた佞臣赤沼と一味の心歟。三ツの内明さば我も明さうず。勝秀如何に」とありければ、監ヲ、尤の疑ひ某が心はな、管領の其中にも、御邊と我は斷金の契りなるに、我にも知らせず都を開く心底氣遣はしく、死すとも生くとも朋友の交りを違へじと、山名に討手とありけるを、請受て某が向ふたる討手なれば、むざと腹は切らせぬぞ。サア御邊の心底、承はらん」とありければ、斯ム、聞えたり。嗚あらん。此左衛門も其通り。勝秀は愚、樊噲が討手なりとて恐ろしとも思はず。諫言申すも君の御爲。死せる孔明、生る仲達を走らしむといへり。死しても忠は忘れまじ。一旦都を立去り、御邊とも内通し、悪人を退け、我君を名將と仰がんと思ひし處に、案に違ひ、御分討手とあるからは、浮世の望みも切れ果て、さて生害に及ぶなり。弓矢取る身の討手を蒙り、手を空しうは歸られまじ。介錯せよ勝秀」と、自害せんとする處を、懸待てく左衛門、實に満足せりく。日來語る朋輩の、斯程に心の合ふものか。此處は死する處でなし。筑紫方へも身を忍べ。我も本國に引籠り、世上の安否を内通し、佞臣の榮枯を窺ひ、義兵を起し討て出、悪人を攻滅し、聖賢に優る名將となさんとはい思はずや」と、理を盡し諫むれば、

中々の事―ちかにも返く

永日―春の永き日

ほんじやり―廻らしく、此歌も松の落葉卷三にあり  
あかうし名ある香木の鼓の胴

左衛門横手を打て、「ハア、左様じや過つた。君の御爲大事の命、此處は死ぬる處でなし。一先落ん。御身も退くか」勝「中々の事」斯「やれ勝秀、斯程に揃ひし忠臣に、君君たらば、唐土も靡け從へ治めんものを、無念にないか勝秀」勝「口惜いは左衛門」と、互に鎧の袖と袖取りつすが取付縋り泣居たる、忠義の涙ぞ哀れなる。勝「ヤア時刻移して益もなし。朋輩の縁盡す」斯「また逢ふ事は命次第」と、泣くく左右へ別れしが、又立歸つて斯「これく、思へば明けていまだ對面せず、これ當年の逢初め」勝「さればく其通り。先新春の御吉慶」此方も「其方も」互に目出度い御越年「此春よりの御悦び」充分の御仕合 珍重く「お盃は永日く」然らば春永、末永、月永、日永「年も壽命も永くと、傳はる御代の時に逢ふ、春の門出を祝ひける。

中の巻

ほんじやり咲て、匂ふた梅の花がた見さいな、藤内二郎。アリヤコリヤ。殿はな、小鼓のヤ、得意物。あかうの胴に加賀皮くれ、くれなるの調べを、千鳥がけにかけさせ、合せ打たるはさつても打た小鼓と、上の町下の町、どつと褒て通した。ほんのり明て唄

加賀皮―此も名  
高き皮  
しつたん―鼓の  
音

佐保姫―春の神  
いでつかり―シツ  
カリ

だん袋―此邊天  
岩戸開きによせ  
ていへり

物もう―物申さ  
うの路、どれい  
は何れよりの轉  
(貞丈雜記)

御吉慶―輕薄に  
いひかく、慶庵  
は追從輕薄なれ  
ば云ふ  
しはオ―やつる  
る、師走にかく  
齋浪人―酔にか

ふくく―彫る  
るにか

ふた鳥の懸聲聞きやいな。藤内三郎殿大鼓の上手で、しつたんにしつたんく。七段作  
る御百姓、明年は八段じや。さ明年は十六たんく、丹波の國の御百姓と、勇みうつ  
たるはさつても打つた大鼓と、どつと褒て通した、春めく大路ぞゆたかなる。ヨイ、一  
夜押開けて四方の春、空の顔莞爾やかふくやか、につこりほやりの笑顔は誰だ。ア、そ  
れだか是だか、春の司の佐保姫君、霞の衣當流仕立、しやんと着こなす四尺八寸。あざ  
を握つて押せく、押込め乗込め米俵、でつかり踏へた大黒く。大黒舞と囃されて、  
天の戸袋だんぶくろ、くわつと開けた初日の色、あら面白やお目出度や。草木心なしと  
は申せども、花の時の時を違へず。實に陽春の德利爛鍋屠蘇の酒、三杯機嫌の朝ほら  
け。物もう。どれい。先當年の御吉けいはく慶庵。めつきり今歳は若うなるく。成程  
成程、目出度い事の言種山草、穂長は白妙楪の淺翠。わつさりわさく、紙衣の袖に  
も春立つと、いふばかりにて金かけて、買ふた袴のしはすの氷、叩いて碎いて若水の、  
湯殿初め着衣初め、衣紋繕ふ若い者、藤内二郎、同く三郎、合せて五郎は曾我に劣らぬ  
住家にも、鱧鱈の素浪人、雜煮の上置輪ん切大根、ずんでんどうく打治つた、時世  
に逢ふも他生の御縁、花の宴、縁から落ちたお乳の人、打た處がふくく福徳、千歳を

とち、一蕊の鳴  
聲ととち、汁と  
かく  
人間萬事云々  
世の幸不幸定め  
なき謎(淮南子)  
香爐峯云々一遺  
愛寺鐘歌枕、  
香爐峯雲撥、  
看(白氏文集)

東方湖一殘嶺神  
のある方にて萬  
福集まると云ふ  
方向に吊る

本阿彌一刀劍の  
鑑定家なる故、  
ほ、こぼれ、研、  
目利の縁語を遠  
ねたり

竹光一刀の身が  
竹なるを云ふ  
春一晴にかく

呼ふ鶴の聲。此方は似あつて雀はちうく、鳥はかアく、鶯とろよ山の諸、精のつい  
たる妻戀猫、猫の化粧、鼠の嫁入、ちよつちつくり色をやる。戀から生れた人間萬事、  
塞翁が馬のうつた太鼓の撥、狸がうつた腹鼓、うつたら鳴るべい、何になるべい、知行  
に成るべい。なれくなれく、花に馴來し王城の町。其方に高山去年の雪、これ香爐  
峯の心なんめり。簾を捲けばお肴に、嵐が雪をもつて北山東山、西に姉里戀廓。正月買  
の初君の、袖を連ぬる裳裾を列ぬる。ぬるくぬつと出る日影に、南枝花始て開く、  
梅に鶯紅葉に鹿、獅子に牡丹昆布に山椒、小粒な男も陽氣を受て、和歌を囀る一  
曲奏る。つるくつるく、釣た處を惠方棚、賑ひ申す榮え申す。押へ申す食申す。  
色めき申す時めき申す。御亭を祝つて御禮申す。ありやこりや、はつあ新玉の春ぞ  
長閑なる。折知り顔に白梅の、路次の垣ほに咲こほれ、研拭ひたる立關前。これは本阿  
彌の屋造と、目利したるも理りなり。藤内三郎武治、奥を見入て、「これ兄者人、本阿彌  
右衛門太郎清祐が居宅、此身代は羨しからず。此内に澤山な銘の物の大小を持つなら  
ば、好い主取て立身を致すもの。何をいふても此竹光、何時か此の無念さを、春といふ  
は名ばかり、心は未だ師走じや」と、小首を投て悔みける。二郎盛治聞も敢へず、「浪人の

主旱魃云々主  
取りに不足せぬ  
事

引きまげぬし  
つかり受合ふ事

町住居、鼓太鼓に、武士の道忘れたかと思ひしに、頼もしい心懸。然らば咄す事のある。兄の太郎家治の主君斯波殿は、近日義兵を起し、佞臣赤沼を攻滅さんとの用意と聞く。此處ぞ我々が立身の種。斯波殿の御味方に加はり、兄太郎殿諸共に、軍功を勵んと思へども、刃物としては脇指一本、斷れ具足の一領も才覺とて叶はず。如何せんと思ふ處に、これ女房は持つべきもの。黄金三十兩調へてくれふといふ。此金子では、御邊と我が軍用意は物の見事、斯波殿の御手に屬し、藤内太郎、二郎、三郎と名乗て、赤沼親子が首提げ、目覺し高名御感狀を拜受し、今の泣言止ふぞや」と語れども、三郎は少も乗らぬ顔色にて、「テ、主旱魃はいかず。斯波に扶持を受んとは勿體なし。日外兄太郎殿の肝煎にて、某奉公望みしに、氣に入らぬとて在付かず。斯波に嫌はれ無念の折節、赤沼入道幸滿殿へ肝煎らんといふ人あれども、拵へに資本なく、延引に及ぶ中、犬二郎滿景より、斯波左衛門は勿論、宗徒の郎黨一人にても討來らば、三千石は相違なしと、これ慥な書中到來す。御内方の調へ給ふ金子、少々配分あれ。身の廻り大小拵へ、斯波が面打、赤沼殿に奉公し、三千石では仕好い事。二人扶持や三人扶持の御合力、兄貴其處邊は引ませぬ」とぞ廣言す。二郎勃然空笑ひ、「兄なればこそ二人扶持の合力とは先過分。

婚しう御座る一  
應と反對に云ふ  
木上り一獄門

去ながら、二人の兄が主と頼まん斯波殿の大敵、赤沼に随ふ其方に、此大切な金子與へて、敵に勢付ふとは言難し。天下の忠臣賢臣と呼ぶる斯波殿に、嫌はるゝを口惜と思ひ、手を下げ稼いで奉公し、斯波殿にも戀慕はれんと思ふ心はなく、末頼みなき佞臣の、赤沼を主に取らんとは、道に背く無分別。追付獄門の相伴せんずる瑞相、エ、笑止な」と教訓ある。氣短き三郎くつと急ぎ、「春早々から獄門の相伴とは、兄じや人嬉しう御座る。此三郎が相伴するか、賢臣の斯波左衛門を木上りさするか。今御覽せ」と言返す。三ム、扱は斯波殿に附く我々なれば、太郎殿も、此二郎をも討べきな」三「チ、まさかの時は、此三郎も弟とて容赦はあるまい。すれば組んで落る一戦に及ぶ時、貴殿の首は某が討取り、兄甲斐には獄門の木を太ふして、外よりは五六寸も高ふ上てやらん」といふ。二郎腹に据兼ね、「うぬが知行になる某が首、戰場までもなし。今でも取られれば取て見よ」と、脇指に手をかくる。三「イヤ此三郎が取兼ふか」二「サア討て」三「サア来い」と、柄に手を懸け睨み合ふ。目の鞘外しの下鉤、身は竹刀拔兼て、暫し挑み合けるが、三郎飛退去て、「これ二郎、好い加減に引もせず、我々が大小、眞身でなしと侮るか。組伏せて赤沼殿へ、引ても合點なれど、兄弟のよしみ許し置く。追付大小調へて、眞劍の勝負せん。待て居れ

葎竹の筥とへ  
ちザ口とかく

鴨鴨何かもかもに  
かく

萬歲殿云々一尺  
萬歲を呼び、  
鼓を貸せ汝は彼  
所にて見物せよ  
といふ也

盛治もりはると、上うへは立派りつぱな鞆口さやぐちに、篋へらを遣つかふて別わかれける。心こゝろの裏うらこそ不覺ふかなれ。二郎見送りにらみおくり、「弟あにと思おもひ、廿あまやかす情なさけが、却かえつて頭勝あたまがちになりけるよ」と、呆あはれて立たちし垣越かきこしに、とりぐく響ひびく羽子板はこいたの、音おとは娘あんなの集あつみや。笑わらひに春はるの色籠いろこもる。祝儀しゆぎも籠こもる伊達籠だてこもる。情なさけも何も鴨かもの羽はね、雉子かざりの風切かざり思おもひ羽はや、思おもひの數かずを、唄うたひと二た三ふみよい四よう、十二じふに三さんまで未まだ君知きみしらず。十五じふご六ろくから濡鷲ぬれささぎの、羽はねの數かず々く年の數かず、讀よむ聲聞こゑければ姿すがたまで、左ひだりこそと思おもひ遣やり羽子はこ板いたは、正月しやうげめきし景色けしきなり。藤内ふぢうち二郎にらも曲者くまものにて、さても間まの好よい羽子板はこいたの音ね。姿見すがたみたしと思おもふ處ところへ、仕舞しまふて戻かへる二萬歲殿まんざいごの、鼓つづみを少すこしかしこへ寄よせて見物けんぶつせよ。面おもて白しろい事ことして聞きせう」と、戀こひも鳴手なるての曲きまぐら鼓つづみ。垣かきの内うちには本阿彌ほんあみの、一人娘ひとりむすめの玉椿たまつばき、侍女こしもとまでが拍子はこ聞き、鼓つづみに合あせてつく羽はねの、打合うちあはせたる如ごとくにて、往來ゆききりも留とどまるばかりなり。しづ心こゝろなき春風はるかぜの、羽はねを吹ふき上あげ横よこぎつて、藤内ふぢうちが襟袖えりそでにはらくと落おちとまる。二郎にら袂たもとに拾ひろひ入れ、鼓つづみを渡わたし萬歲まんざいに、目禮めらいしてぞ返かへしける。羽子板はこいたもつて玉椿たまつばき、侍女こしもと諸共もろとも走出はしりい、藤内ふぢうちには氣きも附つかず、其處そこか此處こゝかと梅うめの枝えだ、搖ゆりつ振ふるひつ尋たづねける。藤内ふぢうち羽はねを取とり出し、扇あふぎを廣ひろげて一二三四ひふみよといふ聲こゑに、姫振返ひめかへり、「アレ彼あのお人ひとの拾ひろふてじや。意地いぢの悪わるい。これ此方こゝちへ下くださんせ」とありければ、藤内ふぢうち眞顔まがほになり、「誰方だれなたの羽はねか存ぞんぜねども、年としの數かずつけば夏瘦なつやせもせず。

老女房一六十二の年上の老女となり、米一枝にかく、八十八を合すれば米の字になる歎

しよげ一間のわらき體  
往來も見る一往來の人も見てゐるゆゑ恥かしからん

蚊が喰ぬと申すゆゑ、少しの間借ます。女中方の大事の物、長ふつきは致しませぬ。早ふついでのけませう。一、二、三、四、五、七、八、九」と口早に數ふれば、玉椿打笑ひ、「お年は其様に往きそむないが、數はたと取らしやんす。眞々においくつが定じやまで」と手を取れば、二、ホ、ウお家程ありて好い目利。我々は恰當疵なしに二十六。羽は疾につき仕舞。是は又女共が名代に突く羽なるが、なふ此女が、私に六十二の老女房、當年八十八歳。顔の皺は漣や、志賀の山越え頭は雪。それでも八十八じやとて、我手に米とやられます。此米の八十八、一日には突れまい。數取許で仕舞ましよ。十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、五、六、七、八。なふ草臥や」といひければ、姫は羽を引たくり、「お内儀様はあるまいが、いかい嘘を言しやんす。羽子突く事も上手なり。嘘つく事も上手なり。抱付く事も上手である。此抱付の上手奴に、抱れて見たい」と抱付けば、有繫の藤内しよけになり、扇の骨で白壁に、小坊主書でぞ居たりける。侍女共取付て、「さても小氣な往來も見る。門の内へ些と御入」と、手を取て引ければ、藤内是ぞ幸と思ひ、「何と此家に、將軍より御預りの銘の物、數多あると承はる。武士たる者の冥加の爲、戴く事はなるまいか」と、皆までいはせず姫悦び、「おやすい事く。將軍様の御重代天國小鍛治義光、其外名に



夕節―云ふにか  
けて祝の振舞を  
いふ

襦袢―圍き袴の  
刀―忘ずるにか  
身開―身の疑を  
解く事

燗付―鍍金にか

負ふ銘の物、今日は御鏡開きにて、奥の座敷に飾られたり。玄關からは人目あり。それ路次口の錠明きやや。沙汰しやんな」と夕節の、人に紛れて入にけり。藤内三郎武治は、兄が歸るさ待伏し、役けてくれんと元の道、本阿彌の門の内、奥の路次口細目に明く。何かは知らず入て見て、「叱られたら出る分」と、獨語して身を細路次の、取次の桁縁の、障子を明て床の間の、床に置れし一腰の、好き折紙の相州物の、中に取ても出来心、盗みといへば氣も後れ、前後棒鞘身は慄ひ、足もしどろに取て出、行方知らず成にけり。暫くありて家内には、「折紙道具失たり」と、家來は面々身開きに、上下騒いで共吟味、出入を穿鑿する處へ、路次より歸る盛治を、門外まで附出して、「盗人知れた」と押取巻く。二郎騒がず、「これく、卒爾せられな。我們は宇治の邊に居住の浪人。用事あつて出京し、女中方の誘引にて、御太刀頂戴いたせし分。胡亂ならば女中衆へ尋ねられよ」と斷はれども、「吐す程晝盜賊。旦那の留守を狙ひ、女子子供を瞞し、手の好い盗人、打よ括れ」といふ處へ、外より歸る下部の男、「只た今二一の橋にて、棒鞘の刀持て走つて下へ下つた」といふ。家來「扱こそはや同類に渡したな。大小もいで搦めよ」と、六尺仲間立蒐り、「意地張らば撲殺す」と、捻伏て大小取り、仲「いやはや見懸ばかりの金拵へ。焼付で火傷すな」と雜

言だらく脇指拔けば、あゝ身の疵物。「こりやく、刀の身を見よ竹の篋。さても見事なお侍。冬としならば此刀を、疊叩きに賣うもの」と、一度に哄とぞ笑ひける。藤内涙にせきくれて、「盗人とは冤罪の難。天道も晴し給ふべし。武士の刀に竹の篋、こそけても此恥を雪ぐ事のあるべきか。舌喰切ても死たし」と、我身を掴み腕に嚙付、大地を踏み付け齒をたよき、絞り泣くこそ道理なれ。いやく少しき恥を忍んで、大功を立るは、丈夫の勇と思ひ定め、「これなふ心あらん人は聞て給へ。毛頭覺えなければ、分疏なし。去ながら、一門兄弟歴々主も持たる者、我も望みある身なり。繩かよつては一家の破滅。又後日に盗人あらはれなば、此家内、主人下人何十人あるかは知らず。犬鶏に至るまで、生て置ぬが合點ならば兎も角も。されどもそれも無益の事。願くは了簡あれ。某身上かせぎの爲、妻の女房、今明日に金子三十兩借調へると申したり。刀の折紙、幾許か知らねども、盗人の實否立つまでは、右の金子を渡し置ん。逃失せる身にもあらず。土地で人にも知られたり。繩を許して此了簡頼み入る」とぞ申しける。家の番頭文平次、「ム、聞えたく、好い言分。折紙は百貫、町人方の賣道具、旦那の留主に失ふては、此文平次が譯立たず。三十兩あるに極らば、五兩は某まどふべし。宿へ送れ逃すな」

いとしほなげ  
いとほしの囀

おさし—子供の  
もり役

と、兩人兩手を引張れば、一人は髻を取り、四方を棒にて取圍み、「サア歩め」といふ處へ、姫玉橋走出、「やれ其人は御存じなし。いとしほなげに何事ぞ。許してたも頼むぞ」と、泣叫べども聞入れず。先を拂つて途次、面も恥も名も晒の、宇治の里へと三重送り行く。世も微なる陽炎の、森の下庵軒荒れて、月の影さへ盛治が、妻の女房小晒は、良人の出世の物入に、我身を捨る志、あはれ優しき貞女なり。媒介の老女、供の男に財布を持せ、「内儀様御座りますか。今日御契約の日限ゆる、金子も渡し手形をも、極めません」と腰懸る。小晒悦び、「何故に遅いと心待いたせしに、先此方へ」と請じ入れ、「さて良人には、大名方の若君の、おさし奉公と言聞せ、良人の判も預りしが、世間へも其通りにいふてさへ下されなば、茶屋廊の外は、何なりとも嫌はねども、先のお主の名を聞て、手形も仕度い」とありければ、小聲になつて、老勿體ない。お山や女郎に遣るものか。先のお主は、さる御本寺の大寺の、悟開いた長老様。寢酒のお伽にそれ様を、三年限て置たいとの御事。此方から沙汰が仕度うても、彼方が嚴い隱密。三十兩は捨金、四季の仕着に遣ひ銀、未來も悪ふはあるまいぞいの。サア金渡さう判なされ」と、手形と共に出しける。女房はつと涙ぐみ、「如何に良人の爲なるとて、出家に思はれ、來世まで取外さん悲や」と、不

身だしなみ一見  
にかく、種て心  
掛くる事

覺に涙はすよめども、差當つて變替も、泣く／＼判を捺ければ、價の金を讀み渡し、老只今迎ひを連れ參らん。御亭様とも暇乞ひ、門出祝ふて待給へ」と、忙しげにぞ出にける。斯る處へ藤内二郎、大勢が取巻で、「逃だてしたら撲据へる。撲殺せ」と哄動けば、三逃はせぬ棒あてな」仲「逃たら撲ぞ」三「棒あつるな逃はせぬ」と、命から／＼來る體。女房借と見だしなみの、手鍔提げ突と出、「仔細は知らねど我良人。其處を放せ。放さずば片端に突止ん」と、突出す鍔を桿棒にて、打つ拂ふつ叩き合ひ、既に危く見えたりけり。盛治聲をかけ、「やれ女房はやまるな。此人々にも一理あり。様子を聞け」と制すれば、小晒は齒齧をなし、「エ、腑甲斐なや。理にもせよ非にもせよ。浪人なれども藤内二郎盛治といふ侍ではないかいの。白晝に手籠に逢ひ、其恥が立身の害にならうであるものか。良人を出世させんが爲、奉公に身を賣て、只た今手形して三十兩取たる金、皆空事になつたよな。賤しき下々相手には不足ながら、夫婦此處で討死し、名を潔ふ残さん」と、金子を大地へばらりと捨て、杖も棒も厭はばこそ、無二無三に突立しは、人の妻たる龜鑑なり。二郎手籠を振解き、勇んで勵む女房が鍔の柄をしつかと把、三「チ、健氣なり頼母しよ。先靜まつて仔細を聞け。さりとて武運拙きは、今日都本阿彌にて、百貫の折紙道具盜まれ

下和が云々、和氏楚山の下にて璞玉を得て王に獻ぜしに石なりとて左右の足を切られ三度目に寶玉なりとせられし懸韓非子（無下に—無價値に、空しく）

し場へ行懸り、我盜まぬに極れども、分疏（いじわげ）もなき首尾となり、既に牢舎（らうしゃ）の縛繩（しばりなは）かよらんとせし處に、御身が情の三十兩、ふつと思出せし故、それを贖（あがな）ふ約束にて、口惜（くちをし）ながら阿容（あめ）くくと、面を拭（ぬぐ）ふて來つたり。御身が無念の心底（しんてい）を尤と思ひ遣る。我も生んず覺悟（ご）なかつしが、下和が三度足切られ、本意を磨（や）く夜光の珠、韓信は市に股を潛り、勾踐（こうせん）は石淋（せきりん）を嘗て會稽の恥を清めし例し。それ程こそはあらずとも、盜人の虚名（きよな）を忍び、武功を立て一天に名を留むべき念願。繩目の恥を遁れしも誰が情ぞや。妻ながら親にも劣らぬ厚恩（こうおん）を、生々世々に忘れはせじ。思へば如何なる貧乏神（びんはふがらみ）、よしなき處へ導きて、思ひも寄らぬ難（なん）に遭ひ、情の妻の身の代を、無下（むげ）になさうか口惜や。淺ましの運命（うんめい）や」と、男泣きにぞ泣居たる。女房はつと心暮れ、勇む心も弱々と、「さてもく、先の見えぬは浮世（うきよ）ぞや。良人の爲に捨る身は、何れも同じ道なれど、世に立て、所領の主、乘馬（のりうま）より馬よと、綺羅（きら）を研（みが）いて浪人の、萎（すば）んだ肩の怒るをも、人にも見せつ見ん爲に、添（そ）ふて間もなき女夫の中。三年といふ年限で、生別（いさわ）れする身の代を、冤（むじつ）の難（なん）に換（か）へるとは、口惜や本意なやな。金惜（かねをし）いとは思はねども、夫婦別るよ三年の、月日が惜（をし）い」とばかりにて、聲も惜（をし）ます泣居たり。警固（けいこ）共、「遅（おそ）しく、金子を渡せ」と聲々にいふ。妻ハテ渡（わた）すまでも

わや一舞茶

わりなく一是非

道草一道中隙取  
る事に云ふ  
玉水一掬ぶの  
縁、山城縁喜郡  
にあり

なし。其金子取て失ふ」といひければ、聲請取らいで置ふかと、小判吟味し數讀みて、皆皆京へぞ歸りける。盛治渠們を見送りて、「エ、心ない雜人かな。盗まぬには極つたり。此歎きを見るからは、情も了簡もあるべき事。此上はわやにする。取戻いてくれんず」と、駈出るを女房、「ハテ好いはいの。金より命が大事なり。迎ひが來れば往ねばならず。三年の内逢れぬぞや。死なふも生ふも知らぬもの、迎ひの來ぬ間にツイ鳥渡、門出祝はを御座んせ」と、泣腫し目を莞爾と、涙片手の暇乞ひ、哀れわりなく三重別れ行く。跡は霞の八重一重、山吹の瀬を我中の、天の川瀬と又何時か、馴にし夫の盛治に、逢ふはたまさか偶々も、歩みならはぬ大和路や。涙に揉れ駕籠揺て、額重しと徒跣足、道の伽とや媒介が、咄しも今の氣に合はず。未だ春浅き御室山、花には雪を雇人が、戀知らぬやら荷も輕き、肩荷の端に烟草盆、折々休む道草の、今の悲しさ忘れ草、思ひ燻らせ思ひ消し、胸に解かせ手に掬ぶ、玉水の邊に着にけり。肝煎の老女聲作り、「これ申し御内儀様、今宵は奈良に泊らせ、明日はお國へ着く。此處で月代剃せ、衣裳も替て袴を着せ、男の姿になします。用意なされ」と申しける。女房大きに仰天し、「それは鳴様何事ぞ。寺方への奉公と、聞くも心に入らねども、それはいふて返らぬ事。月代を剃り袴着て、男

の眞似する約束は、此方や知りませぬぞ餘まりな」と、煙草を吹て顔を掉る。考「ハテ此處な  
人、あんまりぎし〜言しやるな。金遣て手形は取る。それが嫌なら、如何なりと三十  
兩の金立て、此處から往んで貰ひましょ。ヲ、生暖い」と、上着脱ぎかけ、汗押拭ふて居  
たりけり。女房しく〜泣出し、「何事の報ひぞや。奉公の身の代が、男の身にも附く事  
か。三年経つは夢の中。月代刺た髪つきを、戻つて男に見せられふか、人に面を合され  
ふか。道でさへ斯る事。猶行先が思はる」と、泣けど悔めど甲斐もなく、思ひ直すも亂  
るよも、心一つの涙なり。少歎きて歸らず兎も角も、せめての事に様子を語り、堪能させて  
給べかし」と、泣く〜いへば、肝煎悦び、考「ヲ、語らねば叶はぬ事。寺と申すは偽り、心  
を靜め聞給へ。此國の大名、古川權頭清氏殿の一人姫、琵琶の君とて美人あり。斯波左  
衛門義將殿と嫁許。されども父權頭殿は、赤沼入道幸滿と、水入らずの伯父甥とて、斯  
波殿の御祝言、今に延て沙汰もなし。おいとしや琵琶の君、二十歳の花は散り過ぎて  
も、殿御の顔も見給はず。只斯波殿を戀慕ひ、思積つて氣病となり、今養生の眞最中。  
それゆゑ嫖致の好い人を、斯波左衛門義將と名付け、心に勇みつけたらば、自然と藥も  
廻らんと、醫者衆の指圖なれども、眞の男はならぬゆゑ、男らしい女中のお尋ねにて、

油の梅花一香の  
よき水油

青柳に云々一齒  
搦杖は柳の木に  
て作る、青柳は  
男、櫻は女に喩  
へて云ふ

斯まで談合なりし事。月代剃るが嫌ならば、三十兩を今此處へ、立て歸りや」と語りける。女房餘り可笑しくなり、「寺よりそれは優ならん。常々聞きし事もある。左衛門様の真似をして、合戦軍の咄でも、見事間には合せうが、みづからと姫君と、肝腎の夜討には、如何も勝負が付くまい」と、笑ふて憂さを晴しけり。考「さては合點か悦ばし」と、荷物を解き櫛道具、衣裳品々取出す。女房常に連合の、髪月代は手馴れしが、自剃自鬢の初元結、揉む黒髪を玉水の、底の玉藻と水鏡。油の梅花剃刀も、匂を惜む額際、剃れば芥の花蔓、髪置しての幾年か、見馴れし顔に我と我が、別れの涙亂れ髪、共に落來る膝の上。小枕捨て丈長も、捻元結に大髻、眉の引黛男眉、鐵漿落す磨砂。磨楊子の青柳に、櫻咲たる二役や。女とも見え男なら、御物上りの若者と、擬ふばかりになりけり。衣裳あらため太刀刀、衣紋繕ひ待つ處に、引馬乗物徒士侍、七ツ道具を押立て、「古川權頭清氏より、花聲斯波左衛門義將公の御迎」と、呼はれば、少「アレ馬がでんくうつはいの。ア、怖や」とぞ逃にける。肝煎も氣毒さ。考「これく、是は何事ぞ。小なまりになまつて、如何すべし斯様すべいと、男らしう遣らうぞや」と、私語けば打首肯き、少「ム、なんと身が方へ、舅殿よりお迎ひだといふか。チ、太儀く。目出度いをりから、駄酒でも打飲つて、



二面云々―奈良  
山の御柏の二面  
にかにも角にも  
ねぢけ人の友  
(萬葉集)  
古川―降るにか

笑壺―餘念なく  
笑み興ずる

唐辛をかつ嚙り、寒風を凌いで供をせる。先へ行くべい奴様、許さしやんせや」と口掩ふ。袂張肱のしくと、歩むとすれど襦の、身癖顔癖引包む。殿御模様このごの重着の、うら懐しき女肌。男女せこごえなの二面、側柏このてがしはや此手振れ。ふれくお前さきを突立てる。まかせて置く春の霜、古川館へぞ三重迎へける。花聲はなこゑがねに相生あひおひの、島臺しまだい飾る座敷構がまへ、左も賑しくぞ見えにける。家の惣領、藤冠者氏連は、妹の祝言と、装束しやうぞくあらため居る處へ、都より赤沼判官下向の由にて案内し、密に冠者に對面し、「此頃は御飛脚、殊に斯波左衛門義將じじいり入との御知せ。是ぞ究竟の時節と存じ罷下り候が、して夫れは必定にて候か」と、いへば冠者小聲になつて、「中々の事。妹の琵琶の姫、左衛門を戀焦れ、病氣重り候を、父母歎きて申し遣はし候へば、左衛門も合點し、今日けふ駕入り仕る。我們には何も知らせず。是ぞ天の與へ、手を合せて討取らんと、内通致せし處に、早速の御下り。大慶く」とぞ申しける。判官悦び、「さてなふ日外や、此處にて失ひし將軍の印判も、必定琵琶の君の盗みしに疑ひなし。妹とて油斷せられな。それにつき此者は、藤内太郎、二郎が弟、藤内三郎武治、兄を疎んじ我々に仕へんと申すゆゑ、召抱え候。斯る處へ駕入する左衛門奴は、死に來る同然」と、笑壺に入てぞ笑ひける。屋やヤアこれく下人共には一味もある。

書要―天竺の石

諸般一爲ようや  
ちにかく

父母聞かば事姦し。随分忍べ。」赤「忍ばん」と、座敷を立て判官は、土民の家に宿を借り、案内をこそ待にけれ。殿御見んとて琵琶の君、今日はハラリと氣も軽く、此頃になき笑ひ顔、男といへる妙薬に、耆婆も匙をや捨けらし。父母ばかり合點にて、深く包む事なれば、兄藤冠者家來まで、誠の斯波殿御出と、伺候の侍頭を下け、「御通」と申し上る。女心の男の眞似、顔に紅葉の錦縁、疊障りも足浮て、舅君にも姑にも、何う挨拶を諸禮やら無禮やら、唯「應々」と禮をして、頭下けるに隙もなく、割り膝痛く兎もすれば、女子居住居しどけなく、行儀つくるもいたくし、姫君心わくせきと、「申し左衛門様、何がお氣に入らぬやら祝言の取遣も、渡守なき焦れ船、片破れ舟の片思ひ。能ふ煩はして下さんした」と、恨しさうに宣へば、少「焦れ船でも何船でも、手前に帆柱持合せず。本意を背く仕合」と、只禮してぞ居たりける。藤冠者、此體を心得ずや思ひけん、冠「これく左衛門殿、貴殿の御事は斯波の武衛のお館とて、系圖正しく是ある山。氏は何氏、何れより別れしぞ。承はらん」と申しける。南無三寶と思へども、知らずと言はば悪かりなんと、少「ム、さては、私を誠の左衛門にてはなきと思ふ疑ひか。拙者が家の氏系圖、存せぬ事や候べき。末永く緩々と、御物語致しません」とぞ答へける。冠者何かな詞質にせんと思ひ、

「イヤ重ねては重ねて、冠者奴も、言懸つて聴ねば一分異なるものなり。是非語りともなくば、何うぞ又語らせ様もあるべき」と、苦々しくぞ申しける。今は遁るゝ方もなく、小然らば語つて聞かせ申さん」と、まざくしくは言けれど、夢にも知らぬ斯波の系圖。何處へ取付言ふべきやら、這は如何せんと、思ひ亂れて居たりしが、此上は力なし。古への大將兵を、思出すを幸ひに、口へ出るまゝ嘘八百、言ふてのけんと心を据へ、膝立直し息次し、左もありさうにぞ語りける。

もんさく系圖

小「抑斯波の武衛の館と申すは、代々左右の兵衛に任ず。兵衛の官の唐名なれば、家を武衛と名付たり。斯波の氏は源氏なり。惣じて源氏もしなぐの、清和源氏、宇多源氏、村上源氏、嵯峨源氏。中にも斯波は清和源氏、源氏くが四源氏御座る。中に清和ぞ世に光る。光源氏は數島の、歌道の傳受と聞えたる、百人一首の卷頭、天智天皇十八代の帝。陽成院筑波嶺の峰より落つる源の、頼光に胤腹一つの御弟、頼信の跡取頼義の惣領、でないよの愛宕白山八幡太郎、義家に五代の後胤、上總の介義兼末葉、兵庫頭坂田公平

光源氏—源氏物語の主人、峰より落つる云云—みなを川を源とかへて續く



たうわなく一宮  
話なくにて落宮  
り致事せぬ事

てこそ御子まします。常に冷えたる腰越より、追返されさせ給ひにし、九郎大夫の判官源の義經の、一の谷の鴨越、眞逆様に落し子の、末葉に茂る桃園や、済和源氏のちやくく嫡流、斯波尾張守家氏、左近の大夫時氏、其子に宗氏、其子に武衛高經が三男、斯波左衛門義將とは、我々が事にて御座んす」と、口に任する系圖の卷、胡散な處を言掠め、息吐き次第に言ければ、「さても廣き御一家、舅に過たる聲殿や。三國一じや。聲に取濟いた」とぞ諡ひける。權頭夫婦の人、長物語りに女の姿、あらはれては如何と思ひ、「少と御休息候べし。我門も勝手へ罷立つ。皆々是へ」と打連て、座敷を立てぞ入給ふ。小晒は只一人、「さても浮雲や氣詰りや。眞似をするさへ術なきに、能ふ殿達は彼のようにして、生て居さんす事じやまで」と、獨語して身を横に、手枕してぞ休み居る。琵琶の姫立歸り、さし足して寢姿の、背後に立つつくくと、見れば見る程好い男。日の暮るまで待れぬと、とんと抱付臥給へば、「少なふ悲しや」と起上る。袴の相引しつかと取り、姫「こりや騒しい如何ぞいの。暮るを待ぬ新枕、御蔑みも恥かしながら、御事ゆるに氣病して、恠え性なく落着かず。帯紐解て下さんせ。寢て見もせいで嫌はんすか」と、じろりと見たる相貌は、惚て欲しそな目元なり。小晒もたうわなく、「親達の吩咐には、彼の子が氣色本

復までは、寢る事無用とある上に、拔懸しては一分立たず。是非に寢よなら寢もせうが、鞆と鞆とで切合ふ様で、齒切れがせまい」と笑ひける。鯨「しや堅い事ばかり。毒藥變じて藥となる。袴なりとも解しやんせ」と、取附けば飛退きて、小「ア、譯もない。此袴の下には鬼が栖んで、いッかい口で嚙付ます。怖い事じや」とありければ、姫さめぐと泣沈み、「つれもなきお心や。男に立つる心中は、珍しからぬ事ながら、みづからが兄藤冠者氏連と、叔父赤沼と心を合せ、將軍義教公の御判を以て、偽廻文を致せし所を、みづから御判を盗置、新手枕の引出物に參らせんと、兄叔父の敵となり、隠し置たる心といひ、餘り辛き我殿」と、恨み啣ちて歎かるよ。小「御尤く。御判も請取義教公へ奉り、御身の思ひも晴させたいが、肌を觸れて寝る事は、凡夫の業に叶はぬ事。何卒抱付ばかりではなるまいか」といひければ、鯨「それほど寝るが嫌なもの、能ふ聲入はなされたな。今ならずば今宵の中、今宵ならずば明日明後日」小「少將程通ふても、叶はぬ間はかなはぬなり」鯨「能ふ覺えてや」と啣つ目に、涙を浮べて歸らるよ、心の内こそわりなけれ。藤内二郎盛治は、女房とは夢にも知らず、「左衛門殿聲入りの風聞あり。赤沼一家に縁を組み、心を許し給ふ事、飛んで火に入る御身の上、如何にしても氣遣はし」と、借着扮装古川の式臺に

ちんぶんかん  
譯の判らぬ事に  
云ふ

立懸り、當番に近付き、二「斯波左衛門が家來にて候。主人に密と逢ひ申し度き事の候。御取次頼み存する」といふ。番の侍聞届け、「幸ひ廣間にお出なり。斯うお通り」三「御免あれ」と、奥に入れば上段に、器量勇々敷若侍、茫然として座したりけり。我女房の小晒に能も似たる男子かな。さもあれ、これや斯波殿ならんと、額を疊につよしんで、「近來憚千萬ながら、藤内太郎家治が兄弟なれば、お主同然の忠義を重んじ奉る。當代のならひ、親が子を誑れば、子は親に楯を突く。況んや是れは赤沼が一族。殊に御小舅藤冠者は、君を討滅ほさん結構と密々に承る。御運盡て不覺の事も候はば、色に溺るとの嘲弄遁れ給はじ。とつく御供申さん爲參候仕る」とぞ申しける。顔を上げねばそれとも知らず、少「ヤア誰なればちんぶんかん。殊に此左衛門を色に溺るとは、宿に残せし思ふ人の傳へ聞かんも恥かしよ。先おのれは何者ぞ。罷立て」とぞ仰ける。二「イヤ某は御家來藤内太郎が弟、同く二郎盛治」と顔を上げば、少「なふ藤内殿か我夫か」と、走寄て縄付を、小腕捻て取て投げ、二「やれ物狂奴、大名の若君のおさし奉公と偽り、所こそあれ赤沼一家、剩へ女の身の、斯波殿と名乗つて、月代剃て其態は、唐天竺にも例を聞かず。爪一ツ髪一筋、夫に任せし身體ならずや。察する處、敵に頼まれ、斯波殿を賺し寄する計略か、但しは

重疊 此上もな

いはれぬ斟酌  
いづぬ心配

不義か。迎も助けず白狀せよ」と、急て聲さへ慄ひけり。女房動ぜず、「ア、これ聲が高い。不審も腹も立つは道理。去ながら不義をする妾でもなし、敵に與せん様もなし。此處の娘御、左衛門様を戀病の、心ゆかしの伽にとて、瞞まして斯くはなした事。それに就て琵琶の姫、大將の御判を兄の持たを奪取り、床入したらば呉れふといふ。種々思案して見れども、千日千夜案じても、女子同士の床入は、文珠の智恵にも能はぬ事。腹を立てずと御判を取る、分別したが好いはいの。コレ喘く事ではないぞや」と、事を正して言ければ、盛治聞て、「それは案の外の事、出来たく。先其御判が取りたいが、如何したものであらう」といふ。小「これ重疊の思案がある。今宵も姫の忍ばれん、此方様妾と入替り、暗がりに姫と寢て、賺して御判を取り給へ」ニハテそれが何うなるものぞ。餘の分別をせいでいといへば、小「エ、いはれぬ斟酌、妾さへ慾を離るれば、お主の爲じやないかいの」ニ「いやいや、終には左衛門様御夫婦の姫君に、疵がついては後難なり。然らば某閨房に待受け、姫君忍び給はん時、仔細を語り、連て立退き參らせん。時には御判も取戻し、姫君も御夫婦と、本意を遂げさせ給ふのみか、我々が忠義も立つ。好き折柄に來合せたり。此方へ任せ案内せよ」と盛治は、上段の戸をさし廻し、臥したる體にてもてなせば、



鞠垣一鞠の反れ  
ぬ爲に張る綱

六神通一天眼、  
天耳、他心、宿  
命、身如意、漏  
盡の六  
七人の云々一  
語、和漢古語に  
あり

其日に云々一平  
治二年正月三日  
に義朝を殺し同  
じ三日に頼朝に  
殺されしより云  
ふ

女房は植込の數寄屋に隠れ、首尾合せ、一所に連て立退んと、手筈を取て別るれば、早暮六ツの時計の聲。一間くの大蠟燭、星の下りし如くなり。喋じ合せし藤冠者、赤沼判官、藤内三郎、郎徒には走井久七、久八、根地大藏、息をも立てず拔足して、帳臺を押取巻き、鞠垣の大綱をそろりくと引延し、四方に張て包みしは、逃れ難なき手段なり。仕濟し顔に首肯合ひ、面々が懐中より、大釘鐵槌取出し、襖遣戸に手を揃へ一度に打て打付たり。藤内二郎「南無三寶」と、此處よ彼處と開れども、釘付の戸の開ばこそ。障子を破り差覗けば、大網かけて軍兵ども、兵具提け圍んだり。天へや飛ん地へや潛らん。六神通の阿羅漢も、遁れつべうはなかりけり。障子の内には大音上げ、涙を流して、「古人の詞に偽りなし。七人の子は生すとも、女に心ゆるすなとは、今身の上知られた。敵は敵とも思ふべきが、をのれ女奴、此儘にて死するとも、大天狗となつて思ひ知らせん」と、戸障子叩き踏鳴し、「敵の奴們能く聞け。昔が今に至るまで、君を弑し、父を亡みする族はあれども、主と掣とを討取て、世に立し例やある。汝知らずや、長田の庄司は、主君義朝掣の鎌田を害し、其日に其身を討れたり。因果は下れる車の如し。報はん程を思ひ知れ。せめて冠者奴か判官奴か一人討取り、雜兵の五騎も十騎も、左右の脇

大戦には云々  
君臣の大戦には  
父子の私親を感  
ず、此語左傳に  
あり

蟹は甲に云々  
志す所各其分り  
相應すとの謎

に捲込ふで、思ふ様に締殺し、心變りし女奴を、蹴殺いて死なんずものを。エ、く、無念なり口惜しし」と、踏んだる板敷どうく、どうくくくと踏鳴し、血の涙をハラくハラ、はらりくと襖を切裂き牙を嚙み、跳上つて怒りをなす。無念なりける有様なり。障子の外には、女といふを姉の事と心得て、「ヤア愚かなり左衛門。敵の娘兄弟と知りながら、ゆうくと掣入して、女を恨むる不覺さよ。此通りにて乾殺しに逢ひ、餓鬼道に落んより、一思ひに腹切て、修羅道に陥よかし」と、一度に哄と打笑ひ、鯨波の聲をぞ上げたりける。權頭夫婦姉君諸共走り出で、權「ヤア物に狂ふか悪人奴。仁義なる斯波殿と、縁を組で忠を盡し、身を立ん心はなく、謀反人に與し、賢人の大事の掣をも討たんとは、天魔の障碍か淺まし」と制し給へば、毎ヤア聞ともなし。大義には親を殺す。それ搦めよ」といふ所へ、庭の一木の蔭よりも、「チ、暫らくく。斯波左衛門これにあり」と、夕暗照す黄金作り、五尺餘りを差貫き、搖ぎ出たる有様は、鷗群れ居る潮干潟、蘆分け鶴ののさくと、物に恐れぬ威勢なり。藤冠者驚きて、「今まで此處に聲しつるが、何處より逃出けん。それ討取れ」と呼はれば、少ハ、ア愚かく。蟹は甲に似せて、穴を掘るとは汝們が事よ。天下の管領承つて、六十餘州の政道を司る斯波左衛門義將、身

通塗一と通り  
鏡立云々以下  
其品々を賣りて  
話計の用に立つ  
るを云ふ

巴山吹一二人と  
も義仲の妾にて  
剛力なり

は一ツなれども、命にかはり名にかはり、幾人にならうとまよ。これさ藤内三郎、なん  
と此左衛門は、其方が嫂の小晒といふ女に、能ふ似たとは思はぬか。ヲ、似たも道理。  
誠は藤内二郎盛治が妻、小晒といふ女房なるは。控侗者共、女と思ひ怪我するな。並や  
通塗の女でない。浪人の憂難儀、針一本の力にて、夏の物を冬にしつ。鏡立を米にした  
り、硯箱を味噌にする。古葛籠を忽ちに、目の前で家賃にせし神變自在の女なるぞ。去  
ながら、姫君の床入には、神通も叶はぬ悼はしさよ。サア此上は案じもなし。天に二ツ  
の日なし、地に二人の殿御なし。良人の爲めに捨ん命、塵灰芥吹けば散る、煽けば飛ぶ、  
高の知れた浮世の中、假へをのれ們鬼神にてもあらばこそ、斬らば切らん、突かば突か  
ふず、飛ばば飛ばん、跳ば跳ん。命限り腕限り、三ツ四ツの男首、此一ツの女首、換え  
ば換え徳。サア来いと、身もかるく早足を踏み、目の中鋭どく身は凍々しく、勇みか  
かれる有様は、昔の巴山吹が、生れ變りと謂つ可し。毎ヤア口の過たる女めかな。あれ  
討留めよ」と下知すれば、父權頭打物抜き、母も姫も長刀構へ、「主といひ聾といひ、  
親に敵對ふ大悪人。餘すまじ」と入違ひ、少時支えて三重斬結ぶ。其際に盛治は、疊を  
上て板敷を、やすくと切破り、大童になつて顯れ出、「藤内二郎とは我事よ。敵に勝負

はご一四の傍に  
黏をつけて他鳥  
を捕るもの

なけれども、差當ては弟の三郎奴、首捻斬らん」と飛んで蒐る。判三郎討すな者共と哄と喚いて駈合せ、彼方へ追立て追捲り、三郎危く見えける時、女房賢しく、障子に張し大網外し、勇んでかよる新判官、藤冠者が背後より、さつくと網を打かけて、「曳やつ」と引ければ、仰反に打こかされ、「これはく」と手足も叶はず、はごに罹りし野末の鳥、心地よくこそ見えにけれ。此猛勢に盛治は、三郎を捕て伏せ、高手小手に縛め、寄せ來る雑兵、四方へぱつと追散らし、立かよつて網繩を床柱に括付け、三彼們二人は左衛門殿より舅殿への御年玉、生けるも殺すも御勝手次第。弟は拙者が正月の料理初めの初肴。これを肴に姫君を御供申して御祝言。月代剃たを幸ひに、お興添にも女ども、待女郎にも女ども、侍にも女ども、お侍女にも女ども」四揃花揃、きり羽子つん羽子、二役三役、笑顔、顔つく徳つく色がつく、人思ひつく知行つく。民もつくく、筑紫の果も、東國も靡く管領職、武家繁昌の御代に逢ふ、此の正月こそ目出度けれ。

下の巻

源義教公道行

文武の花云々  
比喩も例の松の  
落葉にあり

舞花雲云々  
にて男は無一物  
なりとも女に奪  
ばると也  
立春云々海の  
はて迄も風をか  
けらるゝ義にか  
も深しと也

鞆衣一破れて短  
くなりたる衣  
二番生一若き二  
番息子

「文武の花も榮えた。初花咲いた見さいな。藤内四郎殿な、太鼓打の役で、代々の太鼓を、あそこらもとに置せて、金の撥を手に持ち、てれつくにはつつてんく、てれつくにはつつてんく。疾うからつとんと打惚れた。なるかならぬか、戀の中の町、なつかの町の町を通り度うはないが、七草たよいててつへい若水。裸花掣百貫、くわんくわんとも鳴るは夜明の、鐘はつんく辛いか、つつてん、天の道せばからず。立春は、鶯啼かぬ離れ島、雪の深谷の奥までも、知ればや知召されたる、御身のうへに如何なれば、御運も今は薄霞。花の長もたとなくに、袂は露に夕の色、赤沼父子が逆心を、防ぐ力も盡き弓の、月の都を月諸共に、落方人と潑漂ふる羅縵の袴、錦繡の重ね引換て、何時の間に鞆衣と統びて、ほつれ出させ給ひける。従ひ仕ふるものとは、御側近き旅衣、狩場に馴れぬ若鷹の、鳥立も知らぬ若草や、二番生へなる若侍、六角左近太則冬、尊氏公の白旗を、守袋に護とて、疊み込みてぞ持にける。山名伊織介氏廣が、肱にかけた

花軍云々―加揚の時節を待てと也

いざや白木―どうなるか知らぬにかく

鞍馬―暗き

咲いた櫻―諸國盆踊唱歌伊賀歌にあり下句花が散るを天にもと

かへたり

鬘雀毛―寶白交りたる毛色

よつしる―四つ足の白き馬

梨子地―金銀の斑點ある時鐘、無しにかく

燕飛んで云々―道は至る所にあるを云ふ、燕飛

侯天魚躍―于淵

言其上下家也

(甲廓)

る服紗には、代々に傳はる軍配團扇、昔を匂ふ梅の鞭、畠山小將監高顯が袋に收め腰に

指す。同じく郎徒藤内四郎光治、彼們もせめて攻太鼓、勝色見せて又何時か、都に歸り花

軍、開かん御代の關路の鳥も、此曉を今少時、忍べや我も忍ぶぞと、門出の鷹に驚き

て、笠打掩ふ人々の、世の成る末ぞ悼はしき。思ふに違ふあらましに、昨日と過ぎつ明

日は又、いざや白木の弓の弦、思斷れどもおもほへず、顧らるゝ九重の、残んの雪のほ

のほのと、花に明け行く比叡の嶽、霞に籠て鞍馬山、鞍置き馬の數々を、繋がせ曳せ歩

ませて、折にふれたる乗心、我北山の御所櫻、春の眺めと櫻蔭、咲いた櫻に何故駒繋ぐ

ヨノ、勇めば駒が、駒が勇めば、天にも上る雲雀毛や、夏は梢も青の駒、祭に加茂の瓦

毛や、紅葉に通ふ小雄鹿の、鹿毛も冴えたる月毛の駒の、銜さへくくと、韁

搔繰りく、栗毛に、乗た馬上はよしや蘆毛に、雪のよつしる白覆輪や、金覆輪、今は梨

子地の鞍鐙、馬はあれども此身には、徒歩路越行く木幡山、弓手にみつの行先は、山梶

原と聞くからは、世に隠らるゝ我々が、此身包むに頼もしく、明ずもあれな淀川の、岸

にかけてたる白浪を、花の網代と朝ほらけ、鶺鴒の鳥鳶飛んで、天に冲れば魚淵に、跳る

教へも上下の、道明らけき鳩の峯、正八幡の鎮座なる、我氏の神軍神、武運を守りたび

葦一芥に似たる  
さいた妻一虎杖  
路の姑一ふきの  
たう

相撲取草重の  
事  
扇の芝一平等院  
内におり頼政の  
自害せし所

給へと、頭を傾け給ひければ、各々遙に禮拜し、君が行衛を祈念ある、御有様こそ殊勝なれ。見渡せば山の名の、朝日に氷解渡り、水や烟を横の島、宇治の里の子打群て唄萌る葦摘む若菜摘む。茅花杉菜にさいいた妻、妻は誰妻老ぬれば、露の姑く。水無い川で船漕ば、其方は目籠で水を汲め。露の姑く。あの松山の松葉をよめや。嫁菜蒲英公土筆、葦菜摘て童の、相撲取草立つ方に、勝てや勝てく。凱歌の、聲高無双武士の、櫓にかけて播磨投げ、上る團扇や扇の芝に、はや三番の勝相撲、名乗て過る杜鵑、待ぬに春を漏出て、弓馬の道も魁んと、漲り渡す長池や、水萍捲分け鳴く蛙。蛙軍の勝負に、お身の上の占問へば、水の源淀みなく、濁なき世に泉川、しばしが程の泡沫に、沈まば沈め頼ある、瓶の原にぞ三重着給ふ。さて其後に、畠山小將監進み出、某召具し候は、藤内四郎光治と申す郎徒、太鼓の妙を得、戦場の進退、御陣の押太鼓、萬里を響かす名人ゆゑ、則ち御代々の太鼓を預け召連れ候。斯波の左衛門が家臣、藤内太郎が弟にて候へば、此者を御使として斯波が方へ内通し、一先御頼み然るべし」とぞ申し上る。義教公やと涙ぐみ給ひ、「我も左こそは思へども、斯波が諫めを用ひず、今斯る身となつたれば、今生にて左衛門に、いかでか面が合されん。仁義ある忠臣に見捨らるゝも、義教が運の極め」とばかりにて、御涙にぞ咽

ばると。斯る處に十八九なる若者、編笠脱で御前に畏り、頭を地に付け申す様、一某は  
 御近習に召使はれし、一色大炊介にて御座候。御壁書を背き不義の科、高眼を掠め女を  
 相具し、欠落重罪遁るゝ方なく候へども、全く色に耽り、御成敗を恐るゝにも候はず。  
 もと我々は一色が實子にて候はず。元來、父母もなき捨子とやらんにて候ひしを、養父  
 一色兵衛拾取り、御目見を仰付られ、惣領に立つべき處に、段々實子出生いたし、養  
 父兵衛尉世を去り、母にて候者、若年の弟を惣領と申し上げ、年嵩の某を末子と沙  
 汰し、式日の御禮も、俄に末子の座に列り、御供に候六角島山山名を始め、肩を比べ  
 し諸朋輩に、面を向んも面目なく、所詮一色が家を出、誠の親の由縁を尋ね、此面目を  
 雪がんと存じ候折柄、心の外に御法式を背き、御所を立退き候。慈悲は上より御免を蒙  
 り、御馬の前にて討死、仕り候はば、生前の思ひ出」と涙を流し申しける。大將御立腹  
 ましく、「など以前首を斬て捨つべかりしに、入道奴が助け落したれば、をのれは入道  
 が大恩を受けし者を、召使はん様はなし。誠あらば立歸り、赤沼入道父子の中、首取て來  
 れ。其時は勘氣を許し召使はんす。罷立て」と御諛ある。大炊介承り、「有難き上意、赤  
 沼父子が首取て、御憤りを安んじ奉らん。如何に朋輩達、若し仕損じて討死すとも、



螳螂云々及ばぬ所へ安進する  
蟬獨、螳螂之怒臂以當車輪云云  
云莊子

矢機作る一各々  
矢を番ひて並んで射る事

敵に半死半生の深傷を負はせて置くべきか。御勘氣御免の御執成頼み申す」とばかりにて、御前を立去りし矢竹心ぞ頼もしき。大將彼が後姿を遙に見遣給ひ、藝如何に方々、彼奴が詞は心得難し。大炊介奴が瘦腕にて、赤沼父子を討たんとは、誠に螳螂が斧なれば、叶ふまじきと歎かんこそ、誠の心なるべきに、容易く討て參らんと、輕々しく立たるは、思へば彼奴は入道が恩を送らん爲、義教が有様を窺ふと覺えたり。追蒐討て來るべし。疾く」と宣へば、血氣熾んの若武者共、邁るばかりに思案もなく、討取て、御門出の一番手を祝はんと、左足を踏で三人は、藤内四郎相具して、揉に揉うてぞ追蒐ける。御運の成せる處なり、旅人の休らふ體にもてなし、側に寄り給へば、何處よりか來りけん、矢一つ來つて、左の袂に立たりけり。藝「這は如何に」と搔投り給へど堪らばこそ、猶亂れ來る矢を凌がんと、笠を持って受け給へば、刈残したる村薄、枯野に立てる如くなり。「今は叶はず是迄」と、此處の木陰、彼處の草村、隠れ顯はれ遁れんと、竹む處に赤沼熊橋、弓箭の武者百騎許りが、一面に矢襖作つて哄と寄せ、赤ヤア義教、都より尾けるを、それと知らざる愚さよ。速かに腹を切れ。異議に及ばば、黙り殺しにせん」と、鐵を並べし其猛勢、遁れつべうは無き處に、藤内四郎取て返し、矢面に駈塞つて、「ヤアこ

生媚―生意氣  
づてん天下―太  
鼓の音より天下  
に言ひ懸けたり

りや生媚過ぎたる奴們かな。畠山が郎黨づでん天下に隠れなき太鼓打の藤内四郎。定め  
て音にも聞つらん。太鼓も打たり敵も討たり、物臭い赤沼に胸が悪ふて頭も討つ。太刀  
も刀も要らばこそ、撥二本が干將莫耶。一曲所望かサア来い」と、四邊を睨んで立たりけ  
り。忝相手になつて犬死すな。遠矢に射取れ」と差詰め引詰め、雨霰と飛來る矢を、四樂  
車太鼓の曲撥見よ」と、撥押取て切拂ふは、前代未聞の三重拍子なり。矢種盡れば敵の勢  
太刀拔つれて討てかゝる。大將も太刀指翳し、支え給ふ其隙に、藤内太鼓を轉ばせ寄て、  
天も響けどうくくと、打鳴らす其聲に、「すは事こそ」と三人は、我もくと引返し、  
大勢に割て入り、斬立て確立て追散すは、潔かりし働きなり。熊橋犬二郎満景取て返し、  
藤内に討て蒐る。四しや痴者奴、太鼓の撥の鹽梅見よ」と、目とも鼻とも言はせばこそ、無  
二無三に叩付け、太刀打落いて小股昇き、俯伏に取つて伏せ、懸て繩をぞかけたりける。  
程なく三人立歸り、「御事初めの御吉相、猶も目出度き驗しには、只今あれにて承はれ  
ば、赤沼入道吉野山の古城に楯籠り候を、斯波細川が攻寄するとの風聞、兩將が陣へ御  
入りあり、逆臣亡す謀、時刻を移すべからず」と、言上すれば御大將、「實にも」と同じ給  
ひける。藤内四郎は、犬二郎が背中に太鼓を括付け、「御出陣の武者揃へ、味方を集むる

天の時云々、天  
時不如地利、  
地利不如人和  
(孟子)

位牌知行一語  
親隠りの牌

觸れ太鼓の、秘曲を打て祝はん」と、撥かるくと打鳴し、聲張上てふれにける。明日よ  
り、吉野の山にて大合戦、寄手の勢は三萬續き、敵役は赤沼入道。御望みの方々、明日  
は疾うからからくく、とんくからくくどんがらが、つってん天の時至り、地の利  
に合へる名將の、出陣こそは三重勇々しけれ。去程に、斯波左衛門義將は、大將軍の御  
出に、面目開く花櫻、吉野に籠る大敵を、血潮になれと赤沼が、大手の木戸に向はる  
る。搦手は細川勝秀、三萬餘騎を引率し、貝を吹き太鼓を鳴らし、鯨波の聲をぞ上けた  
りける。軍大將竹東際に駒を立て、斯清和天皇の後胤、足利の類葉、斯波左衛門尉源義  
將寄せ來る主意は、赤沼入道父子謀逆を構へ、帝都を騷し武將を弑し、四海を覆さ  
んとする罪科據なし。誅戮せしむべき旨承つて發向す。勅命といひ武命といひ、天道  
争でか免れん。速に腹切て親子首を渡せや、やつ」と呼はつて、静々と乗入りしは、勇々  
しかりける武者振なり。入道門の矢切に立て、大將を亡し國家を望むは、弓矢取る身  
の定まる法、和漢其例を知らず。忠孝に托せて、位牌知行に膝を屈むる臆病者、入道一  
家を討んとは、鷺の巢を鼠が狙ふに異ならず。誰かある、討て出追散せ」と、采押取て下知  
すれば、城にも鯨波を哄と揚げ、大手の木戸口押開き、切て出れば寄手の大勢、入違ひ

卯の孔織―白色  
にて感したる鐘

入亂れ、揉に揉うで三重戦ひけり。斯る處に、鐘の御嶽の方よりも若武者一騎、卯の花織の鎧着て、大手の木戸に突立、大音上て、「城内へ申すべき事の候。我こそ入道殿に一命を救はれ參らせし、義教の奥小性一色大炊介久常、御高恩忘れ難く、命の親の御先途に鎧一本の御役にもと、御味方に參つたり。門を開き、城内へ入れて給べ」とぞ呼はつたり。斯くと聞くより新判官、堀の上に顯れ出で、「ヤア表裏者の恩知らず、汝不義の科によつて、害せられんずる處に、父入道が情を以て、命を助け落せしに、其大恩を振捨一大事をなど藤内には語りしぞ。犬猫の畜類も食を與ふる恩は知る。蟲同然の奴輩を、此赤沼が味方にせんずる様はなし。疾く歸れ」と言ひすて、城の内へぞ入にける。大炊介も詮方なく、寄手の陣を見渡せば、藤内兄弟三人陣頭に扣えたり。大炊介佶と見て、「珍らしや藤内太郎、定て沙汰にも聞給はん。某御勘氣御免の願ひ申し上たる處に、大將軍の仰には、赤沼父子が中首取つて來らば、其時御免あらんとの御説に付、味方と偽り城に入り、誑り討たん心入れ、門外までは來れども、敵心を許さねば力なし。方々偏に頼み入る。斯波殿へも様子を語り、御執成にて御免あり、心涼しく好き敵と引組で、討死遂けたき心底を哀れと思ひ、好き様に披露して給べ藤内殿」と、涙を流して頼みける。

心涼しく―櫻く

太郎聲こゑを荒あらけ、「情知なさけらぬに似にたれども、大事じだいの攻口せめぐち、小事せうじに關かはる暇いとまなし。軍初いくさめの味方あじに對たいし、涙なみだの體ていは不吉ふきちなり。餘人よじんを頼たのまば頼たのまれよ」と、愛相あいさうなげにぞ待遇あしらひける。「はつ」とばかりに大炊介おほいけ、さてはふつと叫なはぬかと、撞ぶと座ざを組み歎なげきしが、去い敵てきも味方あじも聞いて給たまへ。某程世それがしほごよに形かたちなき者はなし。誠まことの親おやは見みず知らず。捨子すてことなつて拾ひろはれし、名字みやうじの親おやの一色殿いつしきどのには死別しにわかれ、主君しゆくんには勘氣かんきを受け、朋輩ほうはいには疎そまるよ。此身ぜんの前まへ生せは、何者なにものが生なれ變かはりて此身こゝろぞや一ひとと、諸軍勢しよぐんぜいの見る目めとも、恥はぢず歎なげくぞ哀あはれなる。「エと思おもひ極たぎめたり。軍いくさをすとも侮あなぢつて、好このき敵てきは向むかふまじ。雜兵ざふびやうの五騎ごき十騎じゆき、討うつとも何なにの益えきあらん。兩陣りやうじんの眞中まんなかにて腹搔破はらかきやぶり、生々しやうたうの業煩惱ごふぼんなんを晴はさん」と、腰刀こしがたなするりと抜き、「此こゝろ刀かたなこそ生なみの親おやより譲ゆづりの刀かたな。是こゝろを添すてへて捨すてられしと、養やしなひ親おやの物語ものがたり。二度にど指さすべき鞘さやにてなし。共ともに冥途めいごの供たぐひせよ」と、鞘さやの眞中まんなか二ふたツにさつと切割きりわつたり。不思議ふしぎや鞘さやを二ふた重へに鑿ほり、父ちちの筆ふでと覺おぼしくて、一通いっとうの證文しやうもんあり。諸人しよじん不思議ふしぎの思おもひをなし、鳴なりを靜しづめて聞きければ、高たからかにこそ讀よみたりけれ。「五番目ごばんめの男子だんしに書置かきおく一通いっとうの事こと。抑我等おぼくわれらが氏うぢは藤原ふじはら、生國しやうこくは河内國かはちのくに、依よりて家名いへなを藤内ふぢうちと呼よぶ。久敷浪人ひさしくらうじんに沈淪ちんりんして、五人ごにんの男子だんしを設まく。一藝いちげいに名なある者は、用もちひられずといふ事ことなしといふ本文ほんもんに基もとき、藤内ふぢうち太郎たろうより、二ふた郎三らうさん

郎四郎まで、笛鼓を習はしむ。汝は襦袢にて母に後れ、父又今死に蒞む。孤兒とならんいとほしき。路頭に棄てて養育の、又餘の親を待つ事も、誠の親の情なり。共に孝行忘る可らず。藤内五郎忠治へ、慈父藤内大夫實治判」と讀みも終らず、太郎二郎四郎も立寄り、見れば父の手蹟なり。「ありしとばかり見ず知らぬ、弟の五郎なりけるかや」五兄々達か懐しや」と、兄弟ひしと抱き付き、慕ひ歎くぞ道理なる。城の内には聲々に、「斯とも知らば誘き入れ、疾く討て捨べきものを。あれ餘すな」と言ふ程こそあれ、我もく木戸押開き、鎗先揃へて支えたり。何國よりか來りけん、藤内三郎高小手手に縛められ、陣中に跳出、「城の大將聞てたべ。先日古川が館にて、兄の二郎に搦め捕られし藤内三郎武治なり。情れなき兄奴が生けもせず殺しもせず、遣放しの放し飼、近來無念千萬なり。繩を解て給はれかし。兄二郎奴が首取て、此無念を晴したし。如何にく」と呼はれば、城に籠る藤冠者、「任せて置け」と飛んで出で、屋ヤア三郎か珍しや。大事の味方一人搦めさせては口惜し。サア働け」と解く處を、三忝しと腕首取り、前へ捉て引寄せ、撞と押伏せ、三一旦の出來心、兄に背きし後悔さに、誑つたるぞ白痴者。直に此繩戴け」と、三寸繩に括り上げ、「兄弟の中直り土産にする」と廣言して、味方の陣へ押立て行く、心地好か

三寸繩―野人を縛る繩の法(但言集覽)

冴返りたる云々  
一諸別出此の多  
は雲行く時雨の  
雨の音を誘ひて

りし働きなり。第五郎入替り、「今迄は大炊介、今日よりは藤内五郎。四人の兄は親の躰し亂舞藝。我等は自身の才覺にて、棒を一手覺えたり。我と思はん者あらば、某が棒先に當つて見よ」と呼はつて、白銀にて線金入れし、檜の桿棒搔込んで、進み出れば四人の兄弟、「我々が一藝も揃へて軍の目を覺さん。棒に合せて囃せや鼓、吹けや横笛、打てや太鼓。討たり敵」と戯ぶれて、一聲を奏すれば、「這は花々しの者共や。討取て高名せよ」と、走井久七久八、羽根田頼藏根地大藏、栗生熊藏石坂九郎、獲物くを提けて、討てかよれば藤内五郎、棒の秘術の水車、横車、腰車、片手輪違ひ、双輪違ひ、一文字十文字、拂ひ落しかけ落し、百手を千手と術を碎き、數多の敵に駈向ふ、目覺しかりける。三重働きなり。胸板胴骨、眉間眞額打割られ、弓手馬手へぞ伏にけり。「時分は好きぞ乗取れ」と、搦手より細川勝秀、城中へ亂れ入り、堀際堀際追詰め、一騎も残さず討留めしが、赤沼親子を見失ひ、此處よ彼處と尋ぬる處に、中川が亡魂は、花の吹雪の雪女一念の鬼女となつて、「あら恨めしや。如何に赤沼、假へ何處に隠るとも、助けはやらじ吉野山、花を尋ねて山廻り、最期の寒風又此處に、冴返りたる雪氣の雲の、雪に誘ひて山廻り、めぐりくくって輪回の恨み、思ひ知れや」と入道親子を引立てく、「來れく」

出廻り廻り／＼  
て輪回を離れぬ  
妄執の雲の匂を  
取れり

と大將の御前に引据え、猶行末は源氏の白旗、白雪の守神ぞと木綿垂の、雪を散して失せてけり。大將御喜悅淺からず、二人が頭を斬懸させ、凱歌三度三々九度。斯波細川に御盃、藤内五人に五箇國の、御加増御褒美段々に、樂車打て囃した、囃した繁つた松竹の、世よし人よし物なりよし、仕合よしの今年ぞと、祝ふ春こそ目出たけれ。